

天橋立紀行

「日本三景のうちでも松島と宮島に行っただけで天橋立に行っていないのはなんとも残念だな。よし行って見て日本三景卒業しよう」と思い立ってから、「ところで、松島は宮城県、宮島は広島県だったけど、天橋立はどこだったっけなあ」と思い直して地図帳を見てみたところ、京都府とは言っても北のはずれで、日本海に突き出している丹後半島の付け根にあることが確認できました。京都府の宮津市、聞いたことがないなあ。お隣の舞鶴市は知っていたけど。いずれにしても、東に福井県、西に兵庫県との県境線が迫っている京都北部は私にとって未踏の地です。

「丹後半島の東側は、兵庫県北部から与謝野町、宮津市、伊根町にわたってのびる山田断層によって形成された断層崖が顕著であり、断層部の北東部に隣接する伊根町には溶岩が表出するなど火山活動の後も残る。また、伊根町から宮津市北部には地すべり地形が集中している。」というこれまでに聞いたことがまるでない地理情報も仕入れて、いざ天橋立を擁する丹後半島に向けてレッツゴー。



さて天橋立地域に足を踏み入ると、天橋立は目の前に見えるようになったものの、自分が天橋立のどの部分にいるのかさっぱりわかりません。そこで全域マップを見てみると、今自分がいるのが文殊エリアだということが分かりました。そう言えば、この地域に乗り入れている唯一の鉄道である京都丹後鉄道の「天橋立駅」があるのもこの文殊エリアであり、“戸籍”上も天橋立の住所が「宮津市字文殊」となっていたことを思い出しました。後でわかったのは天橋立は様々な形の日本三傑とか百傑の類に選ばれているのですが、文殊エリアにある天橋山智恩寺は、古来より文殊信仰の聖地であり、『日本三文殊第一霊場』として広く知られているのだそうです。対岸にあるのが府中エリア。いずれにしても、「文殊」とか「府中」の地名があるところから見ても、当地には相当な歴史があるものと思われます。



そして早速、天橋立の二大展望所の一つとされる文殊エリアにある天橋立ビューランドに登って、天に舞い上がる龍のように見えることから「飛龍観」と呼ばれる絶景を満喫しました。ここからは南から北へと真一文字にのびる天橋立を真っ正面に望むことができます。「股のぞき」で眺めると松がうろこ、白砂が背びれで、龍が天に舞い上がる

様に見えることが「飛龍観」の名の由来だそうです。また天橋立といえば、天橋立に背を向けて立ち、腰を曲げて股の間から景色を眺める「股のぞき」が有名ですが、直立時に見られる空と海の景色が逆になり、海が空のように見えて天橋立が天にかかる橋のように見え、股の間から神々の住まう天上界をうかがう様を現地で感得することができました。なお、何故「天“橋”立」と呼ぶのか分からなかったのですが、「丹後風土記」によると、橋立の「橋」はもともと日本を作った神様のイザナギが天界と下界をつなぐために作った橋(ハシゴ)のことだったんですね。

宮津湾(右側)と阿蘇海(左側)を南北に隔てて、文殊エリア側から対岸の府中エリア側に達する全長 3.6km の砂嘴、実はこれが「天橋立」なのです。ですから、ここを渡ることなくしては「天橋立に行ってきた」とは言えない寸法になっているわけです。そして、この幅 40~110m で長く伸びた砂嘴は、約 6,700 本もの松が生い茂っている文字通り白砂青松のプロムナードで、左右に海の景色を見ながら爽やかな散策の一時を過ごすことができます。日本の名松百選、日本の名水百選、日本の道百選、日本の白砂青松百選、日本の渚百選に選ばれているのもむべなるかなだなぁと思える素敵自然環境なのですが、文殊エリアからほど近いところに天橋立神社(橋立明神)がひっそりと佇んでいました。そしてすぐ横にあるのが日本名水100選の一つ「磯清水」であり、これが神社のお参りの際、手水として利用されているのだそうです。しかしここに沸いているのが真水だと聞いて私は「ええっ」と驚きました。周りを海に囲まれているこの場所の地下に真水の水系があるというのは何故なのだろうと思ったからです。

一般的には「宮津湾の海流と阿蘇海の海流がぶつかり、砂が徐々に堆積したことによって形成された砂州(さす)が天橋立」とする説が罷り通っているようです。しかし、外界の宮津湾はともかく、潟湖(せきこ・湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形のこと)の阿蘇海には野田川が流入していますが、とても宮津湾の海流とぶつかり合うような海流が起りそうな気配が見えません。更に翻って言えば、砂州上に生えた約 6,700 本もの松。これが海の近くであるにもかかわらず生い茂っているのは、砂州に「真水」の地下水脈が存在しているからこそなのではないのかという思いが募ってきました。また、宮津湾側は砂浜であるのに阿蘇海側は玄武岩状の“橋桁”が長く続いているのに気が付いた時に、出がけに仕入れていた地理情報が頭によみがえってきました。そこで、天橋立は砂が堆積してできたものではない。阿蘇海の部分が陥没して長く続く断層崖ができた窪地に地すべりを起こした地域から土石流が流入してきて潟湖が形成されたのだ。」という自己満足仮説作りまで楽しむことができました。

最後は府中エリアに傘松公園展望台に行って天橋立を北側から一望して「これぞ天橋立」と思える壮観を堪能してきました。ここからの眺めは、天橋立が昇り龍のように見えることから「昇龍観」と呼ばれているそうです。金閣寺を建てた足利義満は6度もこの地を訪れ、文珠山から天橋立を眺めて「宇宙の玄妙」と称え大絶賛したと伝えられています。交通不便なあの時代に足利義満がひきつけられたのも、何千年もの歳月をかけて自然が作り出したこの美観あらばこそものだったにちがひありません。そもそも「日本三景」という括りがされたのは江戸時代前期の儒学者・林春斎が寛永20年(1643年)に執筆した著書「日本国事跡考」がはじめだそうです。儒学者・貝原益軒などは元禄2年(1689年)に天橋立を訪れた際に「天橋立を日本の三景の一とするも宜也」とその著書に記しているのだとか。交通機関が未発達で「日本三景卒業」を称する人などまだほとんどいなかった時代に打ち出した「日本三景」という言葉が現代にまで受け継がれてきているのですから、林春斎先生またはその著書の威光は相当にあらたかだったようですね。近年の年間観光客数は、松島の約370万人、宮島の約309万人に対して、天橋立は約267万人と後れをとっているようですが、かつての足利義満のような常連客も結構多いのだろうと思います。山陰近畿自動車道(宮津与謝道路)の、宮津天橋立IC—与謝天橋立IC間が開通したのもつい近年の2011年(平成23年)のこと、今後の天橋立観光客急増が実感できるようなバーチャル紀行文執筆体験でした。

